

書評「東日本大震災の教訓」（村井俊治著，古今書院，2011年8月，210ページ，A5判，定価：1800円（税別），ISBN978-4-7722-7110-3 C1044） 評・小出 仁（2013），地学雑誌，122（5），（地学ニュース）N71-N72

村井俊治：東日本大震災の教訓 古今書院，2011年8月，210ページ，A5判，定価：1800円（税別），ISBN978-4-7722-7110-3 C1044

2011年3月11日東日本大震災で実際に津波にあって助かった人たちの話から教訓を引き出し，解説を加えている。著者は東京大学生産技術研究所名誉教授で，日本測量協会会長であり，専門は測量や空間情報工学である。著者の曾祖父は，明治29(1896)年の三陸津波の時，財布を取りに行って津波に流されたと祖母から著者は何度も聞かされた。命を守るには，即刻身一つですぐ逃げることだと教えられていた。「今回の東日本大震災を体験した者として，津波の恐ろしさと原子力発電所事故の怖しさを子孫に伝える義務がある」と著者は書いている。本書に記されている話は，テレビ放送や新聞および雑誌類やインターネットのホームページやブログから著者が蒐集したもので，厳密さより多数の話を集めることに主眼が置かれているようである。読者が既に聞いている話もあるかもしれない。しかし，通読すると思いがけない大災害に直面した時の人々の行動が見えてきて，貴重な教訓を読み取ることができる。

熱しやすく褪めやすい—特に都合の悪いことは忘れたがり，災難は自分を避けて通ると思うのが日本人の特性だと言われる。それは日本人だけでなく，多かれ少なかれ人間の持つ特性であろう。しかし，評者も阪神・淡路大震災の5，6年後に京都市内で「京都に地震

は起こらない」と他人が話しているのを偶然聞いて愕然としたことがある。阪神・淡路大震災の前に根強く流布していた「関西に地震は起こらない」という都市伝説は根強く残っていたことに驚くとともに、阪神・淡路大震災の警告が早くも忘れられつつあることを実感した。京都市は神戸市同様に活断層が市内を縦断し、歴史的にも慶長伏見地震のような地震災害がたびたび記録されている。しかし、都市伝説は過去の教訓も専門家の警告も人々の耳に入らなくしてしまうことがある。阪神・淡路大震災前は地震の話をしてても関西では信用されないから話さない方が良くと評者も言われたことがある。阪神・淡路大震災直後は地震や活断層関係の本がベストセラーになったが、数年後には地震関係の本はどここの出版社も出版しませんでしたというまでに関心がなくなっていた。大災害の記憶が生々しいうちに記録を残しておくことは重要である。東日本大震災は被災地域が広大で、津波の爪痕が残り、原子力発電所事故の後遺症も残るので、震災に対する人々の記憶もより永く残るであろうが、それでも恐るべき健忘症との戦いは重要である。

被災者の話とはいっても、助かった人たちからしか声を聞くことができないが、かろうじて最悪を免れることができた人々の話から得られる教訓は貴重である。体験談の中で目立つのは、津波の危険を悟って避難を開始するまでにかかなり時間を無駄にしていることである。「津波てんでんこ」といわれるように、すぐに安全な高所に逃げなければならないのに、危険を悟った後にも物を取りに戻るなどの余計な行動もしている。ヘルメットをかぶって校庭に整列し、点呼を取ったり、避難場所を相談していたり、防災対策の会議をしていたという例さえある。関東大震災の際の火災現場の映像を

見ても、火災に無関心な人々も多く映り、見物している人さえいる。関東大震災で起きた同時多発火災も津波と同様に「即刻身一つですぐ逃げる」べきで、たとえば一時避難場所に集合して列を組んで整然と避難するような余裕はないと知るべきである。

110年前の明治三陸地震津波、さらに1,150年前の貞観津波を先人の教えとして伝承し、住民を守った集落もあったが、多くの人々が直近の50年前のチリ地震津波しか「想定」しなかった。津波の到達高さは危険を知らせる重要な指標だが、いつの間にか過去の津波の到達高さより高い津波は考慮しなくてもよいという免罪符に使われることがある。津波だけでなく、過去に経験した災害以上の災害は考慮しなくてもよいと安直に思考停止するのは非常に危険なことである。防潮堤は過去の津波を防げるように作っていたはずであるが、東北地方太平洋沖地震による津波は防潮堤を乗り越えてしまった。防災対策や科学が過度の安心を生み、東日本大震災のような「想定外」の災害に対し時に無力だったことは忘れることのできない問題である。大災害を「想定外」にしないためには如何にすべきか、防災に関わる人々、特に科学者は考えなければならない。

本書では、津波から助かった人の話から、44か条の教訓とそれを補足する60か条のメモをまとめている。最後に「福島原子力発電所の教訓」と「21世紀の災害論」に1章ずつをあて、「人類が犯した10の大罪」と「日本人が犯した12の大罪」を示している。そして「子供たちに・・・自然のよいところだけでなく、自然の怖しさを教えるべきである。少なくとも災害は語り継がなければならない。」と結んでいる。

(小出 仁)